

大宰府条坊跡

第 85 次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 28 集

1 9 9 1

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第 85 次発掘調査



序

本市は福岡市のベッドタウンとして、急速に都市化し、人口も急激な伸びを示しております。市の南部では大規模な区画整理事業が進行中であり、北部では旧来からの町並にマンション等の高層建築が目立って増えてまいりました。筑紫野市はご存じのように太古から幾重にも栄えてまいりました土地であります。今またここに新しい人の営みが始まろうとしています、そのために先人の足跡を消してはなりません。このため、やむなく工事により失われる文化財につきましては発掘調査による記録を残し、後世に伝えることと致しております。今回の発掘調査では、古墳時代の村の跡のほか、大宰府政庁時代のものも出て来たと聞いております。この発掘調査が遂行できましたのも申請者の（株）シティー観光はじめ関係機関や地元の皆様のご指導、ご協力の賜物と存じ、衷心よりお礼申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成2年3月30日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 渕 正 敏

例 言

1. 本書は共同住宅建築に伴い、筑紫野市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、(株) シティー観光との埋蔵文化財発掘調査委託契約により実施した。
3. 発掘に係る実測・写真撮影は奥村俊久のほか朝日航洋株式会社（現場代理人：村瀬和彦）に写真測量を委託した。
4. 出土遺物の実測は奥村、森部順子が行い、製図は森田くみ子が担当した。
5. 本書の執筆・編集は奥村が行った。
6. 挿図の北は座標北を示す。
7. 遺構の略号は竪穴式住居跡を SI、溝状遺構を SD、掘立柱建物を SB、柱列を SA、ピットを P とした。
8. 発掘時点（遺物ナンバリングを含む）と本書において遺構番号を下記のとおり変更した。ピット番号は変更なし。（右：発掘調査番号／左：報告番号）

SI 01 = S 1	SI 02 = S 5	SI 03 = S 13	SI 04 = S 16
SI 05 = S 18	SB 01 = S 2	SB 02 = S 7	SB 03 = S 3
SB 04 = S 6	SB 05 = S 8・15	SB 06 = S 10	SB 07 = S 19
SB 08 = S 9			

目 次

I 調査に至る経過	1 頁
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
1. 竪穴式住居跡	4
2. 溝状遺構	10
3. 掘立柱建物・柱列	14
4. ピット等	15
IV まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布地図（縮尺 1 / 25,000）	2 頁
第2図 調査地点周辺地形図（縮尺 1 / 5,000）	3
第3図 遺構番号図（縮尺 1 / 300）	4
第4図 SI01・02実測図（縮尺 1 / 60）	5
第5図 SI03実測図（縮尺 1 / 60）	6
第6図 SI04実測図（縮尺 1 / 60）	7
第7図 SI05実測図（縮尺 1 / 60）	8
第8図 SI 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）	9
第9図 SD 断面図（縮尺 1 / 40）	10
第10図 SD 出土遺物実測図 ①（縮尺 1 / 3）	12
第11図 SD 出土遺物実測図 ②（縮尺 1 / 3）	13
第12図 SB 01 実測図（縮尺 1 / 80）	14
第13図 SA 01 実測図（縮尺 1 / 80）	15
第14図 ピット等出土遺物実測図 ①（縮尺 1 / 3）	15
第15図 ピット等出土遺物実測図 ②（縮尺 1 / 2）	16

表 目 次

出土遺物観察表	18頁
---------------	-----

附 図

大宰府条坊跡第 85 次発掘調査遺構配置図（縮尺 1 / 100）

I 調査に至る経過

平成元年6月14日付けで、共同住宅建築に伴い都市計画課から都市計画法第32条による公共・公益施設に関する協議があった。当該地は周知の遺跡である大宰府跡に隣接するため、市教委では試掘調査による文化財包蔵状況の確認が必要な旨を連絡した。試掘調査の申請は同年6月23日付けで提出され、7月8日に試掘調査を実施した。この結果、南北、東西に走る溝状遺構とピットが確認された。このことから、大宰府跡に関係する文化財が包蔵されていると推定された。事業者から提出された文化財保護法57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は8月2日に受理し、ただちに進達した。8月31日には周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、事前に発掘調査を実施する旨の県教育庁よりの通知があった。市教委では、これを申請者に伝達するとともに、発掘調査の実施について協議をおこなった。この結果、筑紫野市が発掘調査を受託することとし、平成元年12月1日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、12月11日から調査を開始した。

なお、調査組織は下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永淵正敏
庶務	筑紫野市教育委員会 社会教育課	課長	川原孝之
	〃	文化財係 係長	山野洋一
	〃	主事	奥村俊久
調査	筑紫野市教育委員会 社会教育課 文化財係	主事	奥村俊久

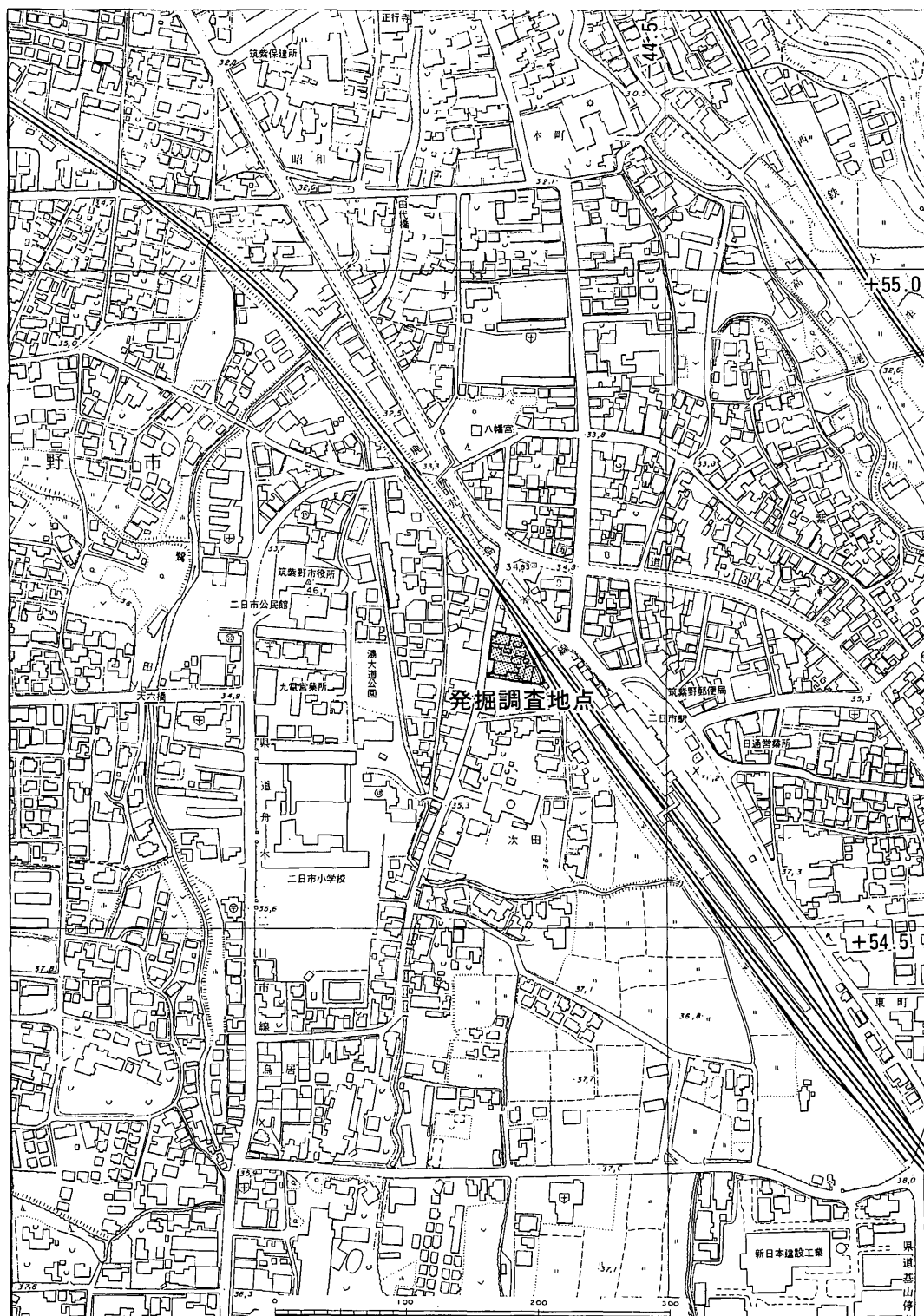
II 位置と環境

筑紫野市は福岡平野と筑紫平野の接点に位置し、三郡山塊と背振山塊に挟まれた狭長な平野部は古代から交通の要衝であった。さらに市の北部は、推定大宰府条坊跡の範囲に入る。市内には杉塚廃寺や塔原廃寺などの寺院跡の外、鴻臚館から大宰府に至ると推定される官道の一部も発掘された（大宰府条坊跡第99次発掘調査／1990年発掘）。

今回の発掘調査地点は、筑紫野市大字二日市868-7番地に位置する900㎡である。推定条坊の縁辺に当たり、左郭一坊二十二条の南側に隣接する。



1. 筑前国分尼寺跡 2. 筑前国分寺 3. 崇福寺 4. 太宰府政庁跡
5. 観世音寺 6. 榎寺 7. 般若寺跡 8. 杉塚廃寺
9. 大宰府条坊跡第85次発掘調査地点 10. 塔原廃寺 11. 武蔵寺



第2図 調査地点周辺地形図 (縮尺1/5,000)

Ⅲ 調査の内容

調査予定地は既に宅地化されており攪乱が多いが、特に南側は鉄筋の建物があり、その基礎や浄化槽等の地下埋設物による遺構面の破損が著しい。このなかで、竪穴式住居跡5軒、溝状遺構7条、掘立柱建物跡・柱列各1棟を検出した。

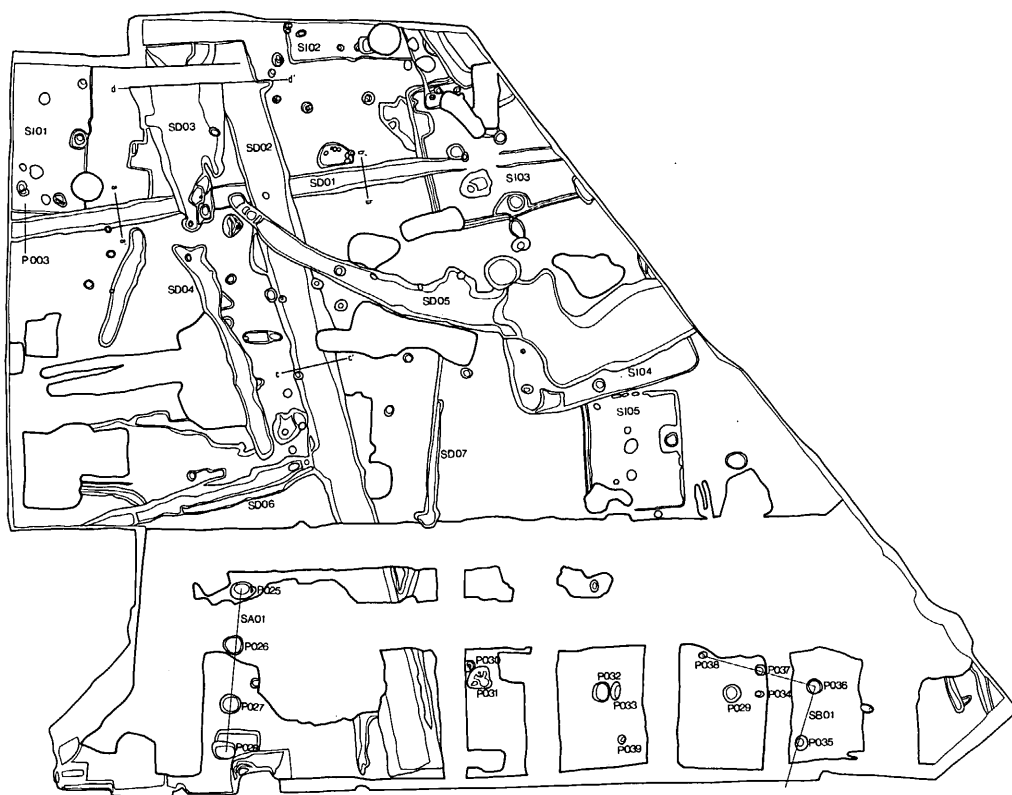
1. 竪穴式住居跡

SI 01

調査区の北西隅で検出した方形プランを呈す住居跡である。検出したのは1 / 3程で、南隅はSD01に切られる。主柱穴は2本で、東壁中央の壁下に柱穴状の径40cmの小土壇を有す。

出土遺物

1は小型丸底鉢で1 / 2近くを欠失する。内彎しながらすばまる偏球状の体部をもち、口縁

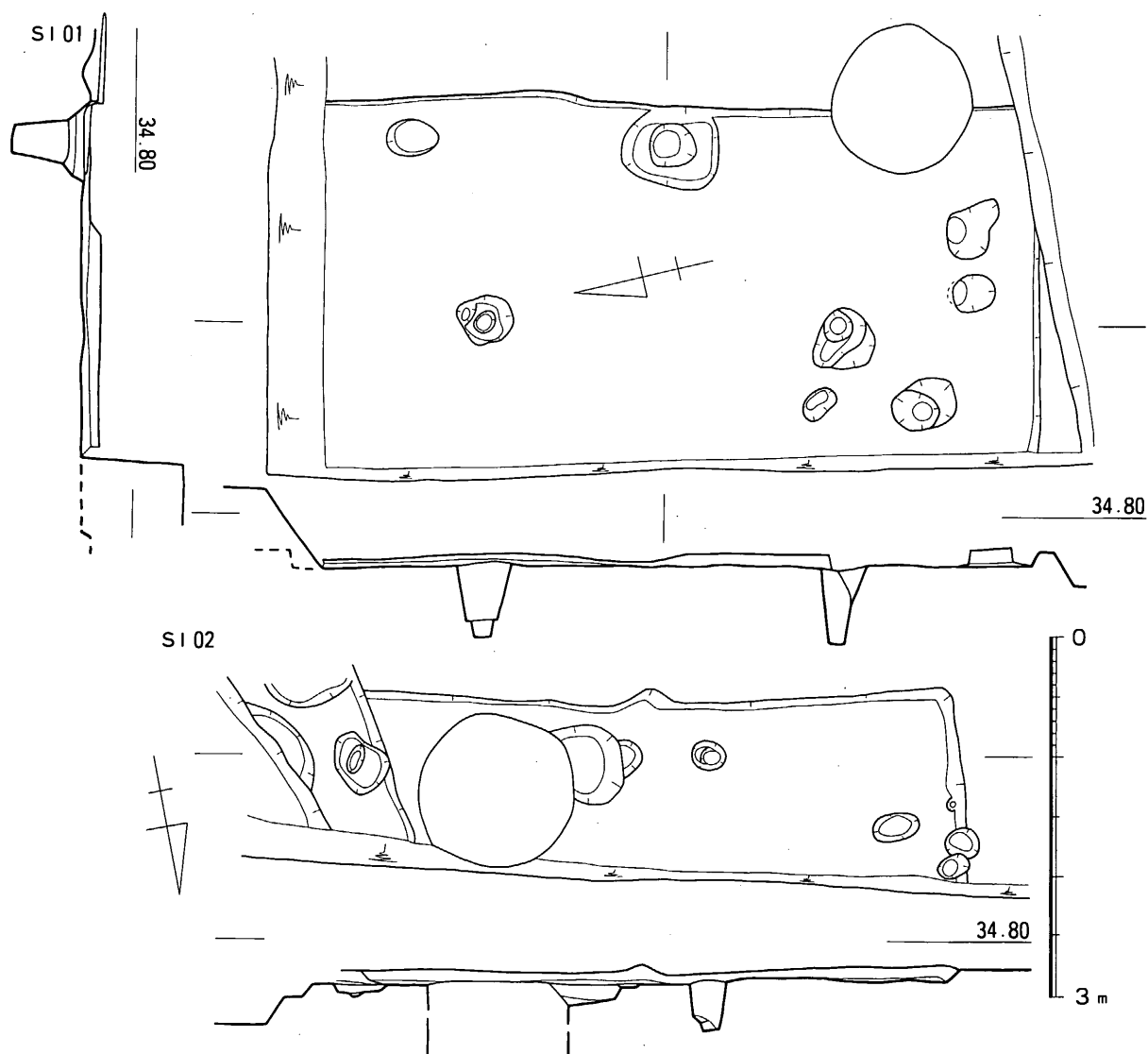


部高は器高に対し 25% ほどを占める。胎土、焼成とも不良で、調整は僅かに刷毛目が認められる。

SI 02

調査区の北で検出した方形プランを呈す住居跡である。検出したのは 1 / 5 程で、東側は SDO 8 に切られる。

出土遺物

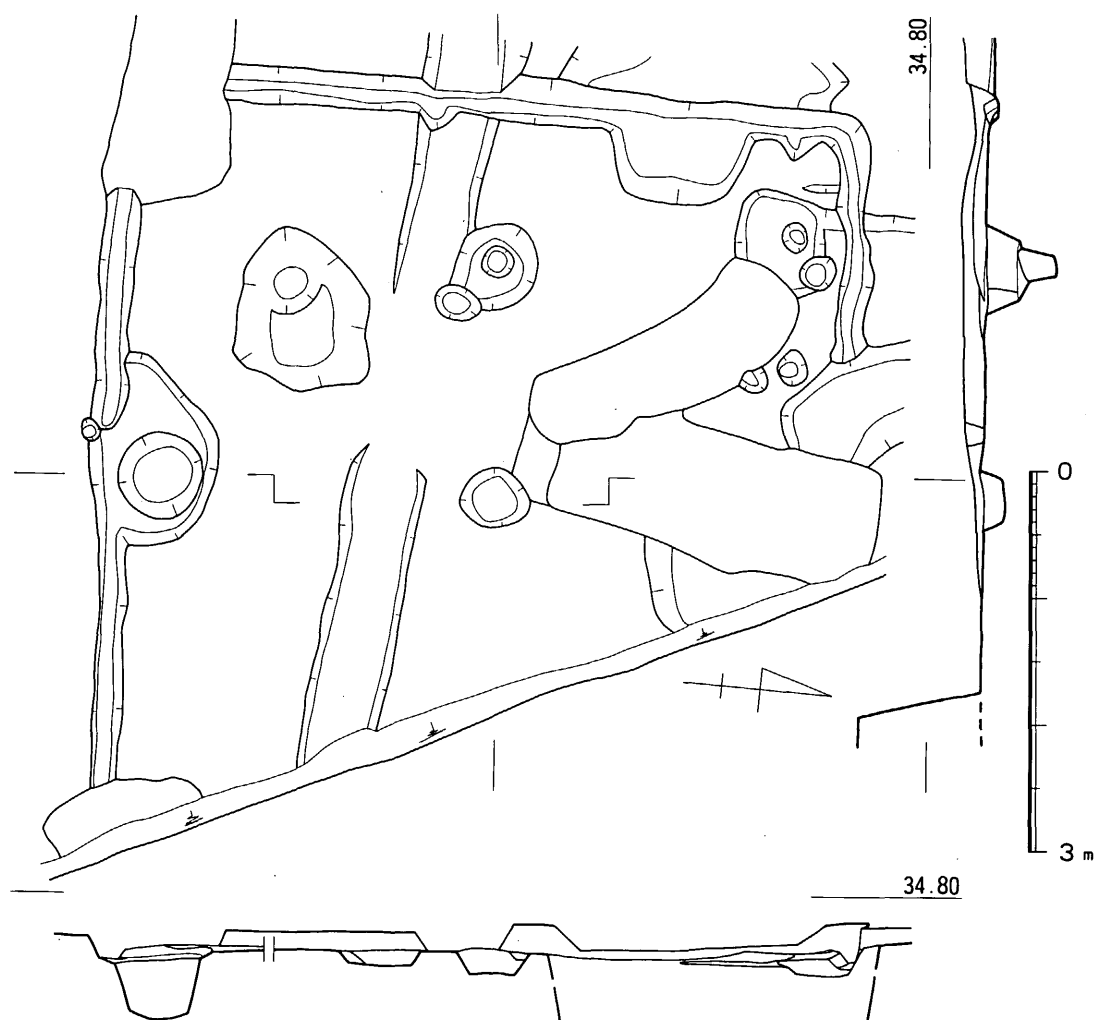


第 4 図 SI 01 ・ 02 実測図 (縮尺 1 / 60)

2は二重口縁壺で、口縁部と頸部～底部の1/2を欠失する。胴部と頸部の境にはあまい三角凸帯を巡らし、刷毛原体による刻目が施される。胴部はやや張りが強い球形を呈し、底部は平底である。調整はほぼ全面に刷毛目が施されるが、胴部下半はさらにヘラ削りされる。また、内面の胴部と底部の境付近は指頭痕が観察され、肩部内面はナデ調整が刷毛目を切る。

SI 03

SI02の南に隣接して検出した方形プランを呈す住居跡である。SD 01・SD08に切られる。1/4程が調査区外へ延びる。中央に炉をもち、支柱穴は2本と考えられる。壁下には溝を巡らし、南壁下中央には径70cmの小土壇をもつ。東西は一辺は6mを測る。



第5図 SI 03 実測図 (縮尺1/60)

出土遺物

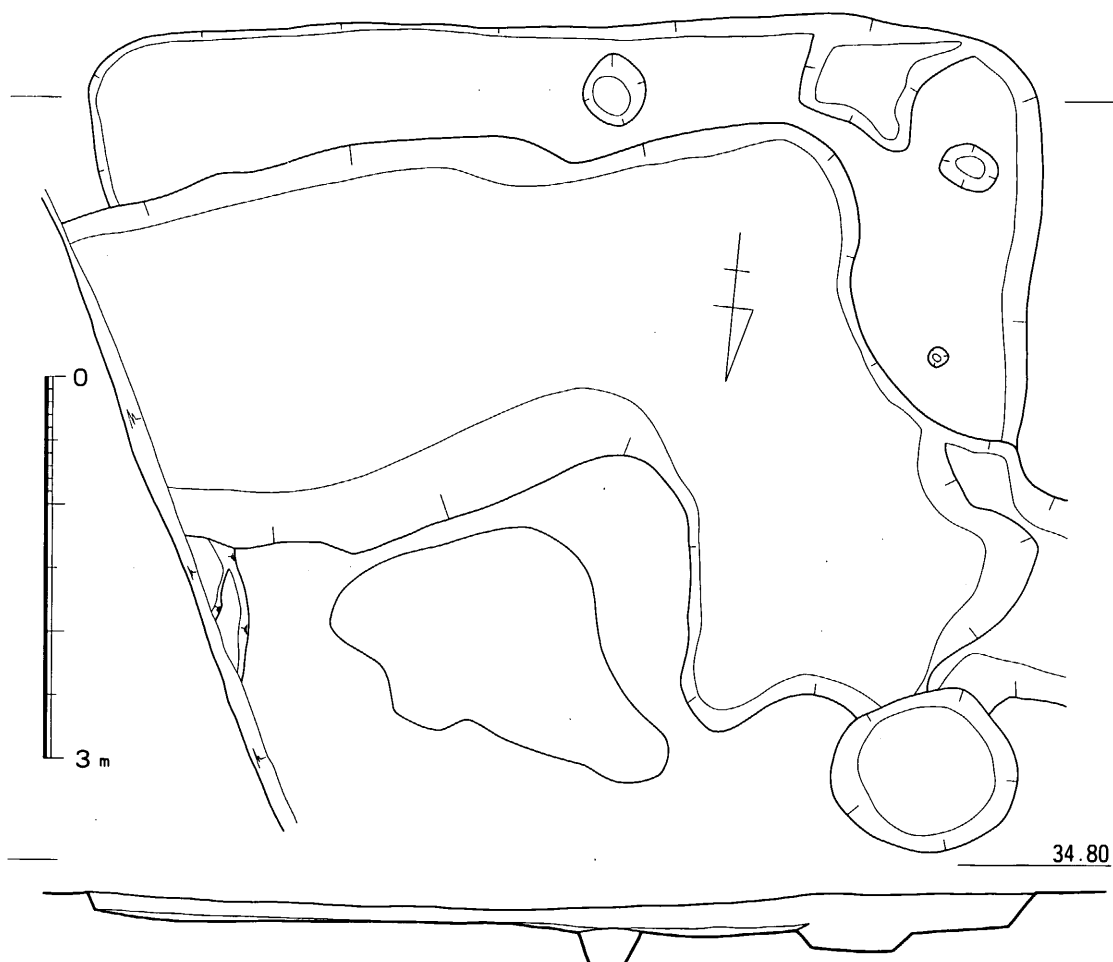
甕の胴部小片が1点出土するに止まった。

SI 04

SD05に切られ、SI05を切る方形プランを呈す住居跡である。SD05から北側は失われ、残存する南壁は東西7.4mを測る。

出土遺物

3は甕の口頸部小片で、摩滅が著しい。口唇部は僅かに肥厚し、内面頸部屈曲部から1cmほど下った所からへら削りされる。4は器台の受部部分と思われる。整形、調整ともに粗い。



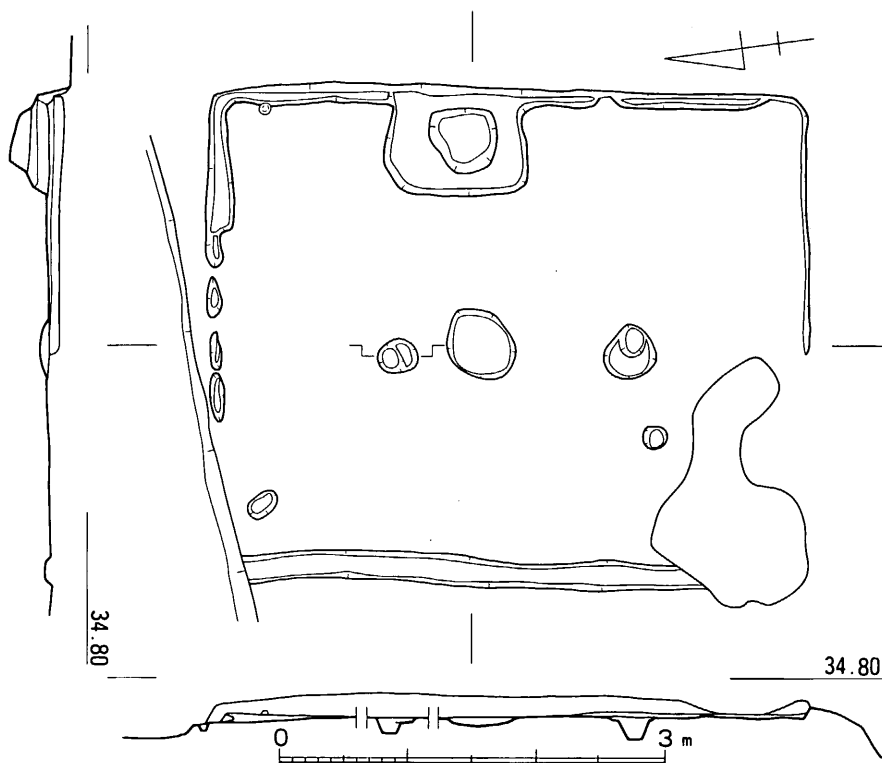
第6図 SI 04実測図(縮尺1/60)

SI 05

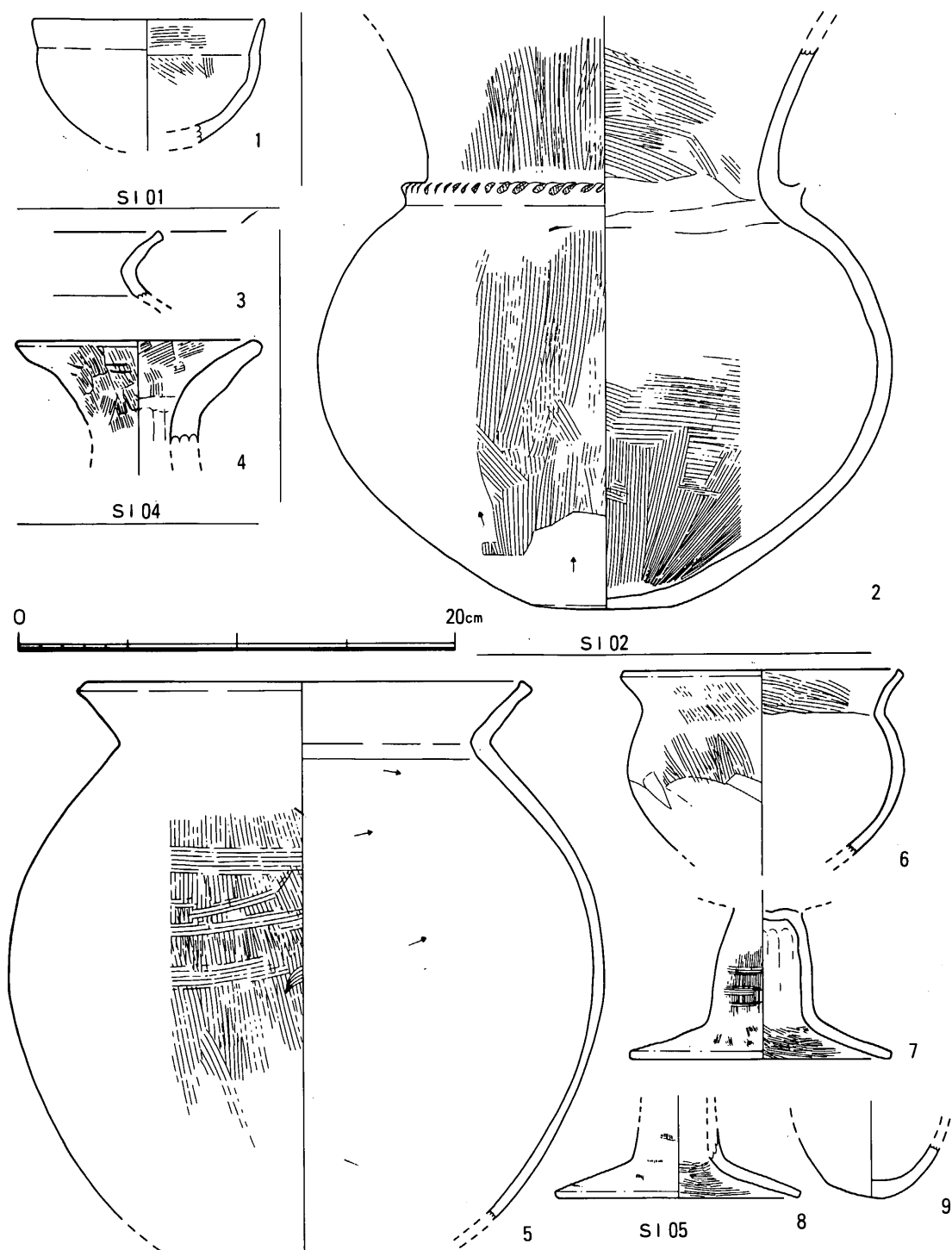
検出した5軒の住居跡のうち最も小振りなものである。SI04に切られる方形プランの住居跡で、南北4.7m、東西3.9mを測る。西半の壁は失われ、壁下に巡らされていた溝の検出から、ほぼ住居跡の規模が分かる。住居跡中央には炉を有し、その両側に支柱穴をもつ。支柱穴は2本で、北側のものは炉との距離が短い。東壁中央の壁下には径50cmの小土壇を有す。

出土遺物

5は底部を含め全体の1/3程度が欠失する。口縁部は直線的に外傾し、端部は摘み上げる。体部は胴部中位に最大径をもつ球形を呈す。調整は口頸部が内外面ともヨコナデされる。体部外面は刷毛目を縦方向に施した後、さらに胴部上半部に対し横方向に粗く施す。体部内面は頸部屈曲部から7mmほど下からヘラ削りされる。胴部下半は外面に煤が付着し、器面は内外面とも荒れる。6は小形丸底壺で、口頸部は直線的に外傾し、端部は僅かに摘み上げる。頸部屈曲部はあまく、体部は球形を呈す。外面調整は刷毛目を施した後、体部下半をヘラ削りする。内面調整は口縁部に刷毛目が施され、体部はヘラ削り後、ナデで仕上げられる。7・8は高坏の脚部で、ほぼ直線的に延びる筒部から大きく屈曲して外傾する裾部にいたる形状を呈す。9は鉢の底部で粗い作りである。



第7図 SI 05 実測図 (縮尺 1/60)



第8図 SI出土遺物実測図(縮尺1/3)

2. 溝状遺構

SD 01

調査区の北側で検出した N-88°-W に方位をとる溝状遺構である。SI01・03を切り、SD 02・03・04に切られる。幅は80cm前後で、断面はコ字状、又は逆台形を呈し、底の部分に砂、または砂質土が浅く堆積する。

出土遺物

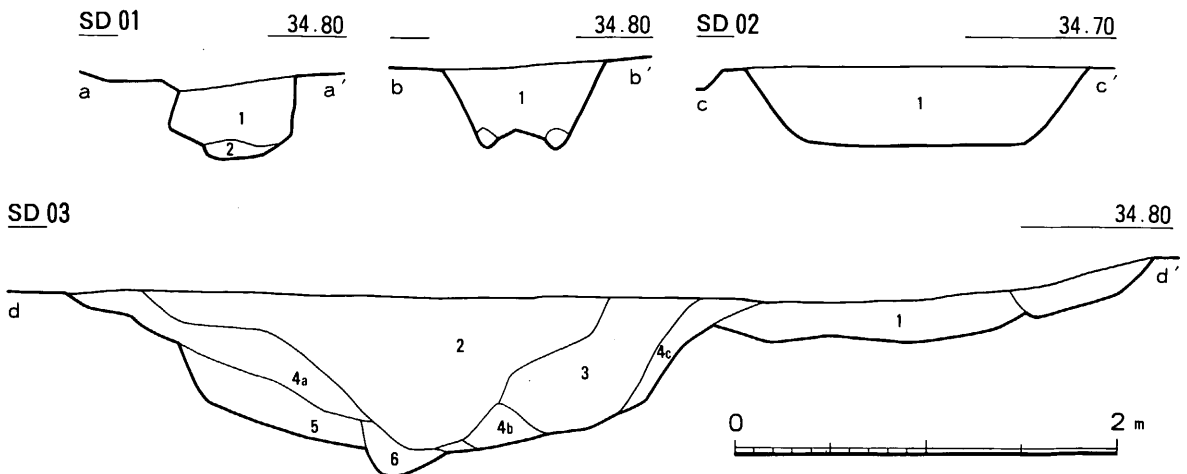
出土したのは、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器片のみである。いずれも小片であるが、なかには口唇部に竹管文をもつ壺の口縁部片もあった。

SD 02

調査区を縦断する溝状遺構で、N-4°-W に方位をとる。SD03・04に切られる。断面は逆台形を呈し、埋土は単一である。

出土遺物

遺物は溝状遺構中央部で大半が出土している。10から12は土師器である。10は口径の小さな



SD 01		2層	黒褐色土 (2.5 Y 3 / 1) 極小～中粒の砂礫を多く含む
1層	黒色土 (7.5 YR 2 / 1)	3層	黒色土 (10 YR 2 / 1)
2層	黒色砂質土 (7.5 YR 2 / 1) に黒色土 (7.5 YR 1.7 / 1) が混る	4a層	黒褐色土 (10 YR 2 / 2) に明褐色砂を約 10% 含む
SD 02		4b層	約 3% 含む
1層	黒褐色土 (5 YR 2 / 1)	4c層	約 30% 含む
SD 03		5層	黒褐色土 (7.5 YR 3 / 1)
1層	黒褐色土 (5 YR 2 / 1) = SD 02	6層	灰褐色土 (7.5 YR 4 / 1)
※	() 内の表示は「新版 標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局 監修による		

第9図 SD断面図 (縮尺 1 / 40)

小皿で、体部から口縁部にかけてやや外反して開き、底部は糸切り底である。11は糸切り底の小皿である。体部は短く、開いて立つ。12は坏で、1 / 4 ほどの破片である。体部は直線的に外傾し、底部はへら切りである。13は瓦質土器の鉢で、口縁部の小片である。14・15は白磁碗である。14はIV類の口縁部片で、外面の施釉は浅い。15はV類の体部片で、色調は僅かに青味が強い灰色を呈す。内面口縁下に一条の沈線を巡らし、その下に櫛状工具による施文がある。

SD 03

調査区の北端で7.5m ほどを検出し、南方向に向かって徐々に浅くなる。方位はN-8°-Eを示す。断面観察から2度掘り直しがあったと考えられる。

出土遺物

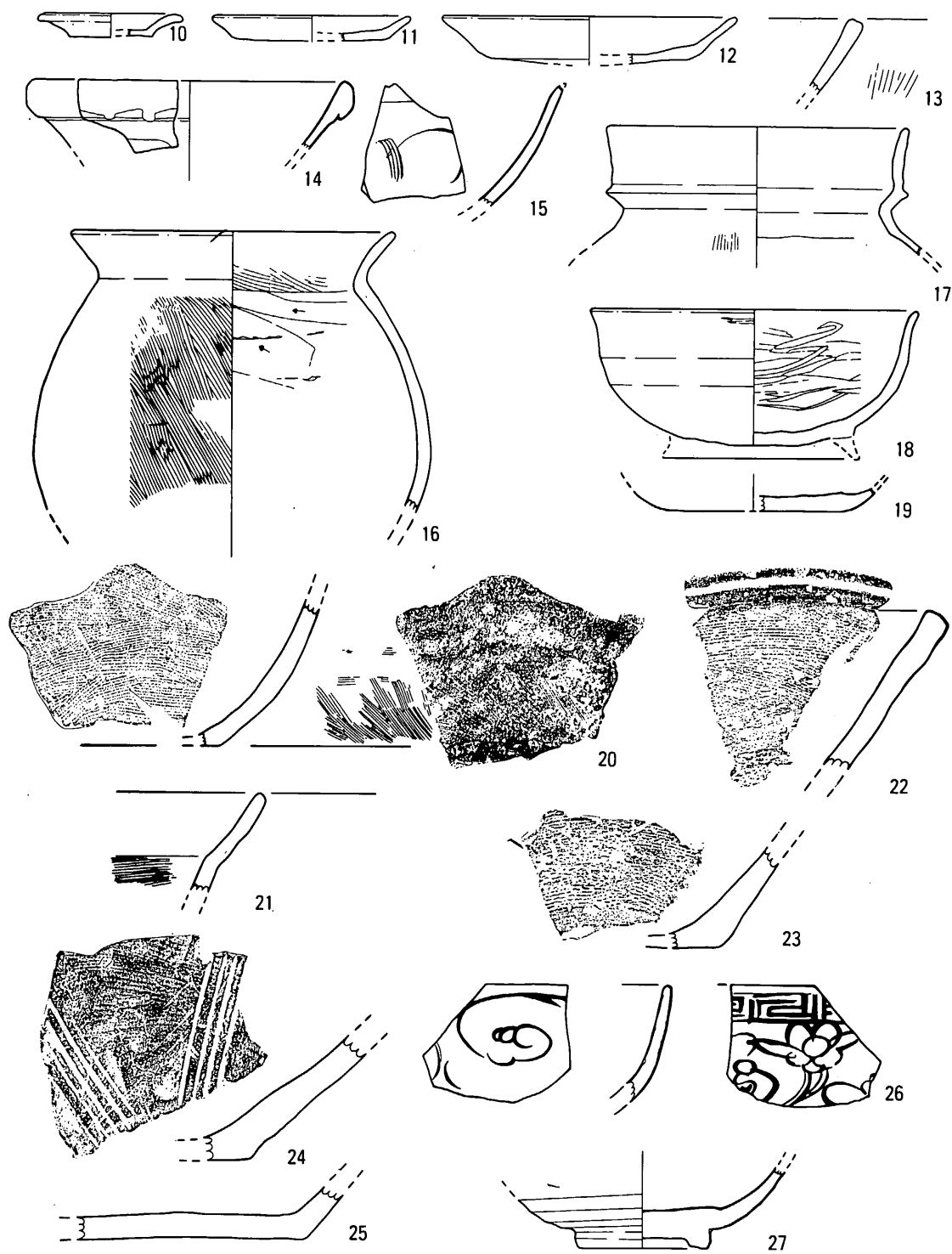
16は畿内系の甕を模したもので、口縁～胴部の1 / 5 ほどが遺存する。口縁部は比較的浅く外傾し、端部はそのまま収まる。胴部は中位に最大径をもつ。口縁部はヨコナデされ、胴部外面は縦方向の刷毛目調整される。内面は頸部屈曲部からへら削りされ、その後、丁寧なナデで仕上げられる。17はいわゆる出雲系甕の口頸部で、直立気味に立ち上がる口縁部を有す。口頸部は内外面ともヨコナデされ、僅かに残る肩部は外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の丁寧なへら削りが認められる。また、外面には煤が付着する。18は内外面を燻した黒色土器B類で、高台を欠失する。口縁部は僅かに外反し、体部中位にあまい稜を有す。全体に摩滅が進み、ミガキは明瞭でない。

SD 04

SD03の南端から1m 足らずの距離を置いて、ほぼその延長線方向に延びる溝状遺構である。方位はN-9.5°-Eにとる。遺構自体の残りが浅いうえに、上部の攪乱が著しくSD03との関係を明確にしえなかった。

出土遺物

出土遺物は少なく、いずれも小片である。19は土師器の底部片で、底径9.2cmと推定される。厚い底部の内面は強いナデで仕上げられ、さらに見込み周縁にもナデを廻す。外面底部は糸切り後、ナデで仕上げられる。22と23は瓦質土器の鉢で同一個体と考えられ、平坦な口唇部外側に1条の凹線が巡る。調整は外面が粗くナデで仕上げられ、内面は刷毛目が施される。21は鍋の口縁部で、内彎気味に外傾し、体部との境は内面に稜を有す。口縁部内外面はヨコナデされ、体部内面は横刷毛が施される。22は瓦質土器の底部付近で、底部は面取りされる。内外面とも刷毛目が施され、外面は底部から5cmの高さから上をヨコナデする。器種は明確ではないが、釜であろうか。また、外面には煤が付着する。



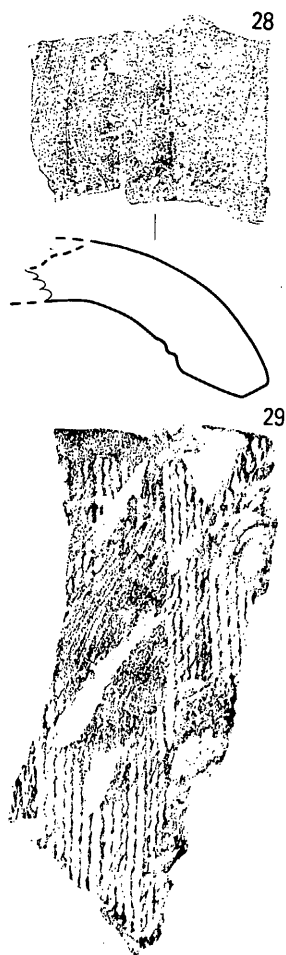
第10図 SD 出土遺物実測図① (縮尺 1 / 3)

SD 05

SD03の南脇から緩やかな弧を描いて東へ延びる。東端はN-73°-Eに方位をとり、徐々に深さを増しながら直線的に延びる。SD03の南脇に僅かに張り出す部分はSD04の一部と思われるが、切り合い関係は明確でない。

出土遺物

24は土師質土器の摺鉢の底部片で、外面は粗いヨコナデ、内面は横方向の刷毛目の上に間隔をおいて4～5本単位の櫛目を入れる。25は遺構の底から出土した、土師質土器の甕の底部である。内外面とも細かい刷毛目が施され、外面はさらに丁寧なナデで仕上げられる。26は青磁碗で外面口縁部に雷文を巡らし、体部には内外面とも花文を配す。27は青磁の底部である。瓦は28・29のほか3点が出土し、塼と考えられる小片も出土している。また、須恵器の高台付き坏身や口縁部が嘴状の坏蓋も出土している。相対的には弥生時代の終末から古墳時代初頭の土器が多いが、いずれも小片である。



SD 06

SD02を切って、N-84°-Eに延びる溝状遺構である。検出した部分は浅いが、断面はU状を呈し、粘質土が埋まっていた。

出土遺物

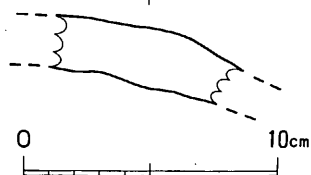
出土量は少なく、いずれも小片である。弥生時代終末から古墳時代初頭の物が多いが、弥生時代中期の壺、ジョッキ型土器の把手、奈良時代の土師器甕のほか白磁も1点出土している。

SD 07

N-75°-Eに方位をとる浅い溝状遺構である。

出土遺物

遺物の出土を見なかった。



第11図 SD 出土遺物実測図②
(縮尺 1 / 3)

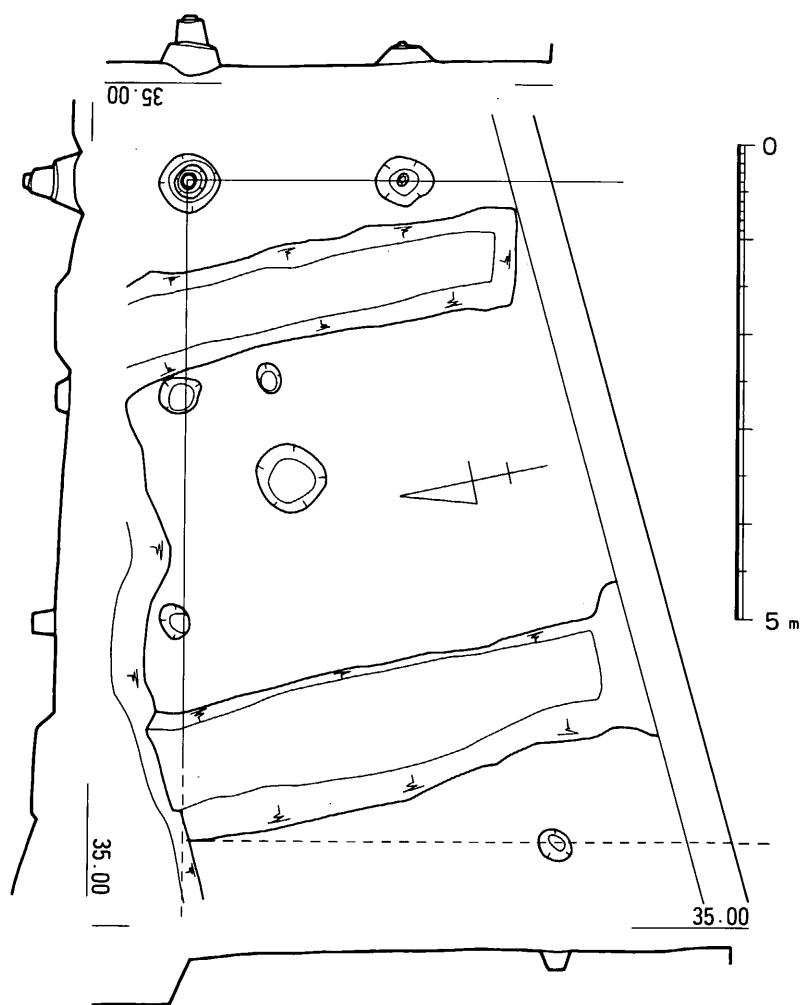
3. 掘立柱建物・柱列

SB 01

SA01の東で検出したもので、北東側角から西に2間以上、南に1間以上の規模を有す建物である。N-25°-Eに方位をとり、柱間はいずれも7尺である。

出土遺物

遺物の出土を見なかった。



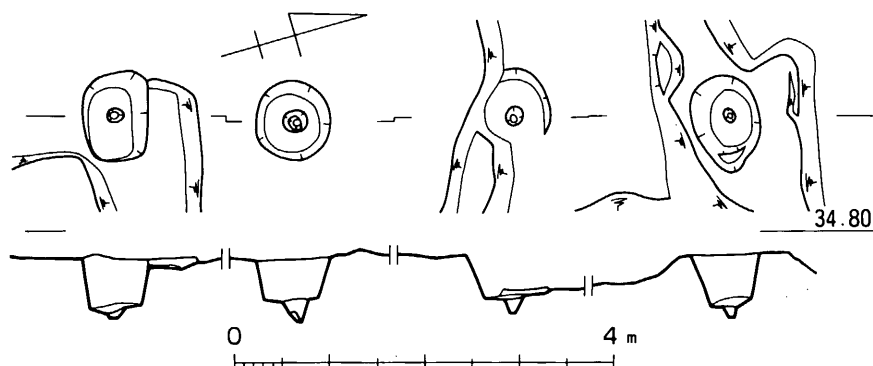
第12図 SB 01 実測図 (縮尺 1 / 80)

SA 01

調査区の南西隅で検出した柱列で、N-17°-E に方位を取る。柱列は南側柱間が 6 尺、中央・北側柱間は 7 尺を測ることから、柱列は検出した柱列を妻とし、平が東に延びる、南底をもつ梁行 2 間の東西棟とも考えられる。南端の柱の掘方は 90×70cm の方形プランを呈すが、他の掘方は径 80cm 程の円形プランを呈す。柱根はいずれも 15cm 前後である。

出土遺物

遺物は総ての柱穴から出土したが、いずれも弥生時代終末頃の土器の小片のみである。



第13図 SA 01 実測図 (縮尺 1 / 80)

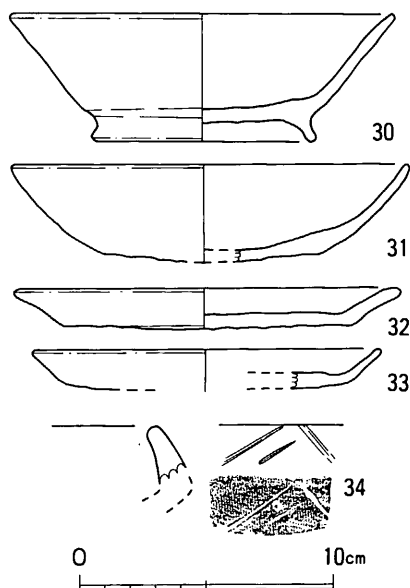
4. ピット等

P003

SI01で検出した。住居跡床面からの深さは約 40cm を測る。

出土遺物

いずれもヘラ切りの底部をもつ土師器で、1 / 2 以下の破片である。30は高台付きの椀で、体部は直線的に外傾する。調整はヨコナデで仕上げられ、口唇の一部に煤が付着する。31は坏で、体部から口縁部にかけてあまい内彎を示す。調整はヨコナデで仕上げられ、体部には凹凸が残る。32・33は皿である。32の体部は外反するのに対し、33は直線的に外傾する。直線的はいずれもヨコナデで仕上げられる。



第14図 ピット等出土遺物実測図①
(縮尺 1 / 3)

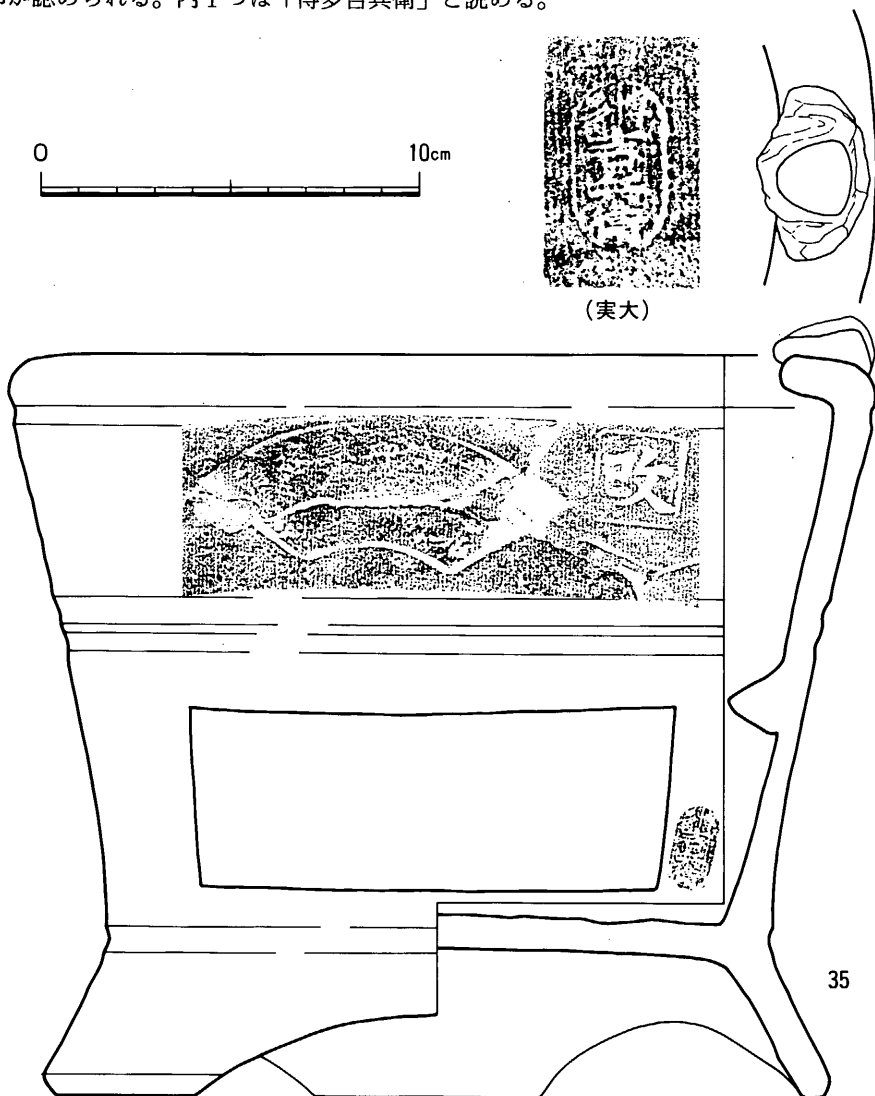
その他

SD06の中央北側に遺物が集中してみられた。遺物は弥生時代の終末から古墳時代初頭の土器片ばかりで、遺構も明瞭ではなかった。住居跡として調査したが、残りが浅いうえに攪乱が著しく、住居跡と確定できなかった。

出土遺物

34は上記の遺物集中部から出土した二重口縁壺の口縁部で、刻線による文様をもつ。

35は近代の「ごみ」を埋めた穴から出土した火ちりんである。全体に丁寧な作りで、3ヶ所に刻印が認められる。内1つは「博多吉兵衛」と読める。



第15図 ピット等出土遺物実測図② (縮尺 1 / 2)

IV ま と め

今回、発掘調査を実施した部分は、既に市街地化しており、特に南半はビルが建てられていたこともあり、遺構は明瞭さを欠く。しかし、住居跡や溝状遺構などを検出することができた。

住居跡は SI02 出土の 2 の壺が弥生時代後期中頃と考えられる。SI05 は布留 0 式甕が出土しており、SD01・04 も遺物の出土が僅かであるが、おおむねこの時期の物が出土している。今回の調査では遺物の出土が少なく、時期は確定し得ない。しかし、残りの良い SI01・03・05 の形態が基本的に同じであり、著しい時期差は無いと考えられ、周辺に弥生時代後期中頃から布留の時期の集落が広がっていると推定される。

溝状遺構も住居跡と同様に遺物が少ないうえ、かなりの混ざり込みもあり明瞭さを欠く。

SD02 出土の 13 は山村信榮氏の鉢類の分類^{註1}によると AⅢの口縁形状を示し、これは 15 世紀以降のものとされている。10 は体部が大きく外反し、形態は異なるが、法量は 1501 年「文亀元年」とされる大宰府史跡 70 次調査 SD 1805 の小皿と同一である。

SD05 出土の鍋類・鉢類についても山村氏の分類で見ると、21 は鍋類 DⅠまたは DⅢに含まれようが、口縁部の屈曲はあまく、I→Ⅱa との変化でいえば、後出的なものであろう。とすれば 15・16 世紀に位置づけられよう。22 は鉢類 AⅢb で 15 世紀以降のものとされている。26 は上田秀夫氏の輸入青磁の分類^{註2}で CⅡ類で、15 世紀前後の年代が与えられている。

溝状遺構の性格については、さらに周辺部の調査による資料の蓄積が必要である。しかし、SD02・05 は切り合い関係にあるが、図示した遺物より新しいものは無く、中世代のものと考えてよいだろう。SD02 は N-4°-W とやや振りが大きいのが、条坊または、これに関する区割りの溝状遺構を中世代に掘り直し利用したとも考えられる。SD01 も N-88°-W の方位をとり、条坊等の影響が考えられる。掘立柱建物や柱列は時期は確定し得ない。

当該調査では、弥生時代後期中頃から古墳時代初頭、中世の外にも、P3 や溝状遺構の混入遺物に見られるように 9 世紀から 11・12 世紀の遺物も出土している。この周辺は長期間に渡り遺跡が存在すると考えられる。

註

註1 山村信榮 「大宰府出土の瓦質土器」 中世土器の基礎研究Ⅳ 中世土器の基礎研究会 1990

註2 上田秀夫 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」 貿易陶磁研究 No2 日本貿易陶磁研究会 1982

本稿の執筆に当たり山村信榮氏のご教示を得た。ここに記して感謝いたします。

表1 出土遺物観察表

挿図 番号	器 高 (残存高)	口 径 (推定口径)	底 径 (推定底径)	色 調	胎 土	焼 成
1	(5.8)	10.6	—	外:淡黄褐色 内:褐灰色	0.5~2mm大の砂粒を少量含む	やや不良
2	(26.3)		6.4	褐色	0.5~2mm大の砂粒を多く含む	良好
3	(3)			にぶい黄褐色		良好
4	(4.8)	10.9~11.3		褐色	0.5~2mm大の砂粒を僅かに含む	良好
5	(24.6)	(20.7)	—	暗褐色	0.5~2mm大の砂粒を少量含む	やや不良
6	(8.5)	13	—	黄褐色	0.5~1mm大の砂粒を僅かに含む	良好
7	(6.9)		(16)	明褐色	0.5~1mm大の砂粒を僅かに含む	良好
8	(3.2)		(11.2)	明褐色	0.5mm大の砂粒を僅かに含む	良好
9	(2.9)		—	にぶい橙色	0.5~2mm大の砂粒を僅かに含む	良好
10	1.2	(6.8)	(4)	にぶい褐色		良好
11	1.2	(9.2)	(6.6)	にぶい橙色	0.5mm大の砂粒を多く含む	良好
12	2.2	(13.7)	(9.4)	にぶい橙色	0.5mm大の砂粒を僅かに含む	良好
13	(3.5)			橙色	0.5mm大の砂粒を僅かに含む	良好
14	(3.2)	(15.2)		淡黄緑色		良好
15	(5.7)			淡緑色	微細砂粒を僅かに含む	良好
16	(6)	(15)	—	褐色	0.5~2mm大の砂粒を少量含む	良好
17	(13)	14	—	褐色	0.5mm大の砂粒を少量含む	良好
18	(6.4)	15.2		黒褐色	0.5~1mm大の砂粒を少量含む	良好
19	(1.2)		(19.0)	横橙色	0.5~1mm大の砂粒を少量含む	良好
20	(6.9)			黒灰色	微細砂粒を少量含む	良好
21	(4.7)			黒褐色	微細砂粒を少量含む	良好
22	(7.5)			にぶい黄褐色	1~3mm大の砂粒を僅かに含む	良好
23	(4.7)			青灰色		
24	(5.8)			褐灰色	0.5mm大の砂粒を多く含む	良好
25	(2.5)			褐色	0.5mm大の砂粒を少量含む	良好
26	(5.5)			緑色		良好
27	(3.8)		6	緑青色		良好
28	—	—	—	淡青灰色	0.5~2mm大の砂粒を少量含む	良好
29	—	—	—	にぶい黄褐色	0.5~2mm大の砂粒を少量含む	良好
30	5.1	(15.2)	8.8	橙色	0.5~3mm大の砂粒を僅かに含む	良好
31	3.9	(15.6)	8.4	にぶい橙色	1mm大の砂粒を僅かに含む	良好
32	1.6	(15.2)	11.2	にぶい黄橙色	0.5mm大の砂粒を僅かに含む	良好
33	1.6	(13.8)		橙色	0.5mm大の砂粒を僅かに含む	良好
34				淡黄橙色	0.5mm大の砂粒を少量含む	良好
35	19.5+1	22.8	20.6	淡黄色		堅微

(法量単位 cm)

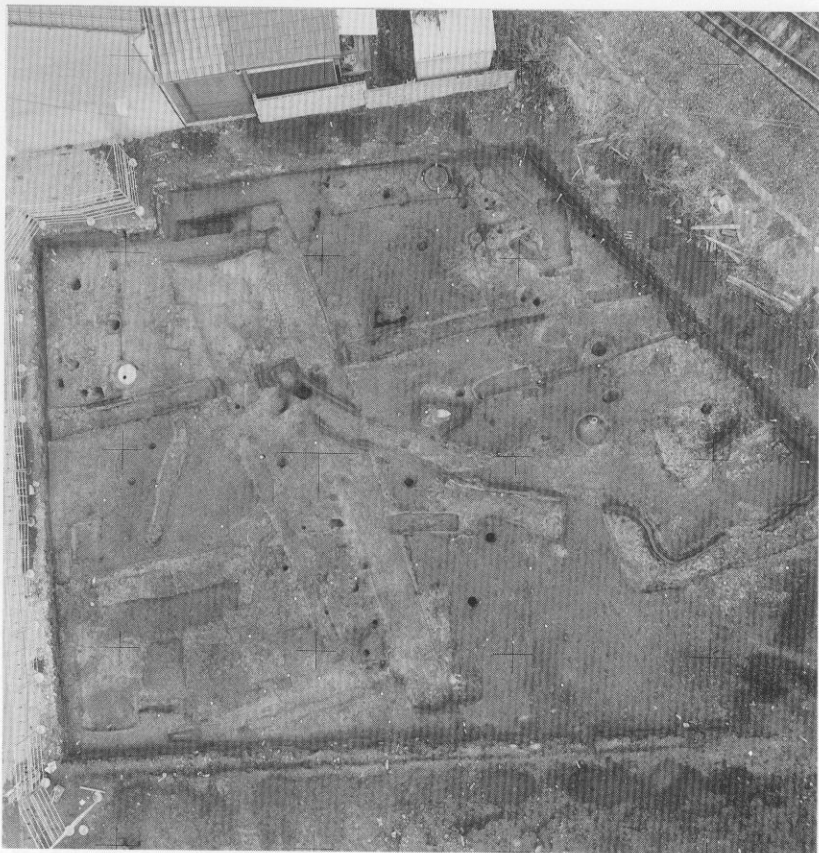
圖 版



調査地点遠景（西より）



調査地点近景（南より）



調査区北半（上空より）



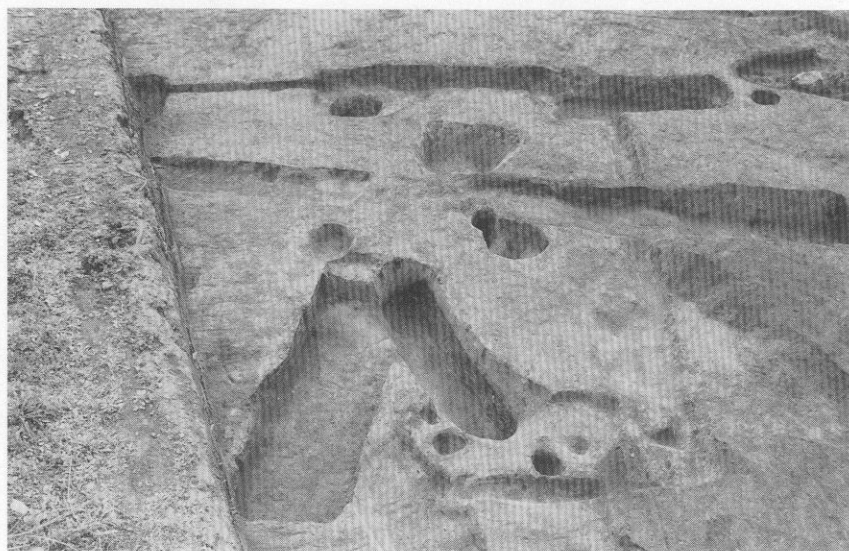
調査区南半（北より）



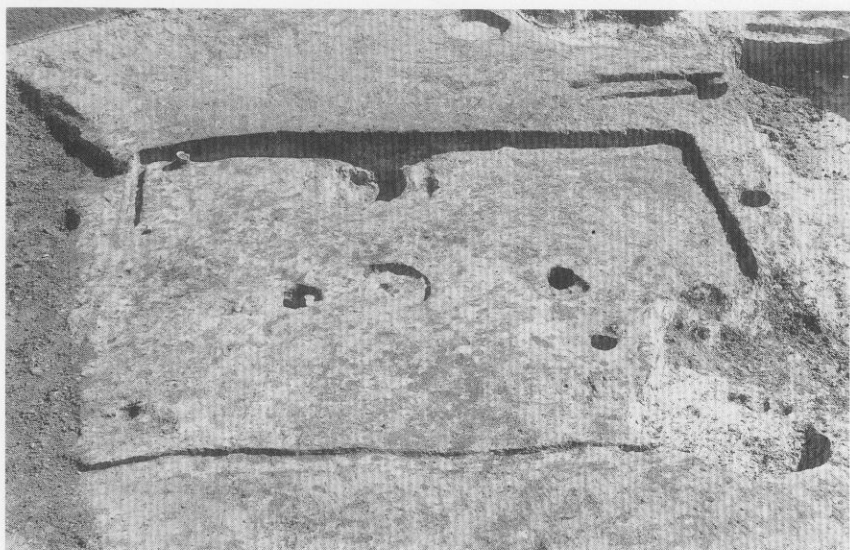
SI 01 (南から)



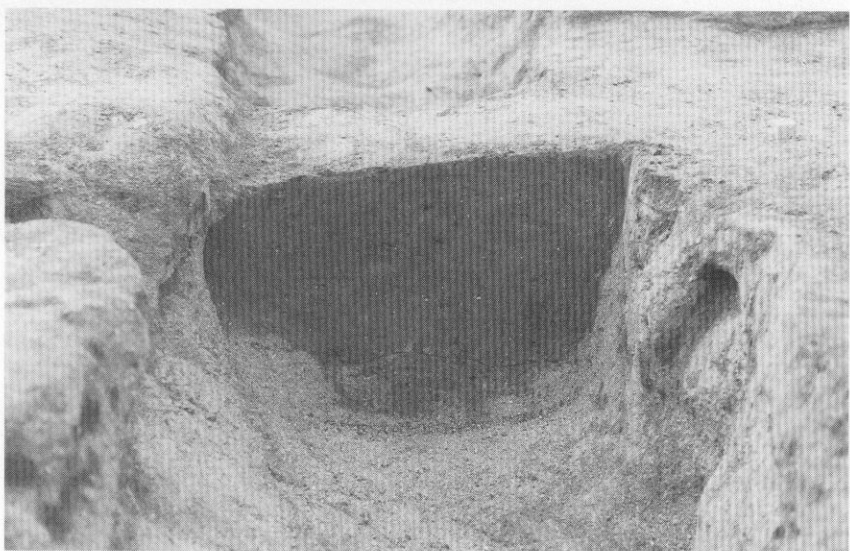
SI 02 (南から)



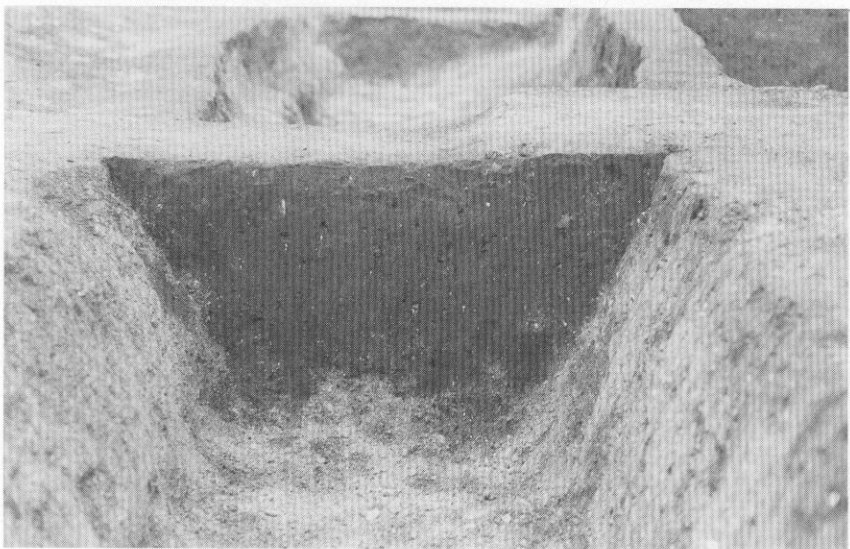
SI 03 (北から)



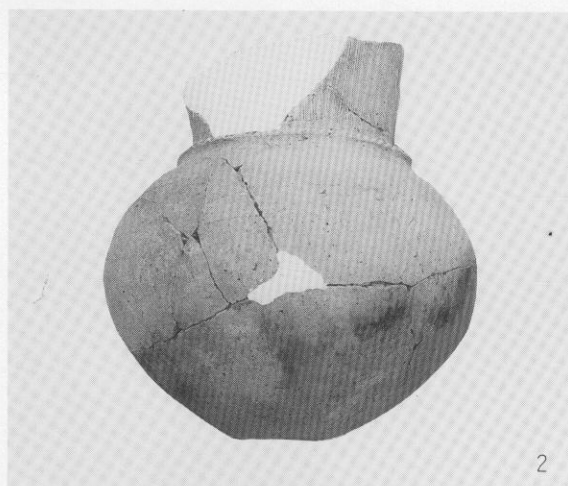
S105 (西から)



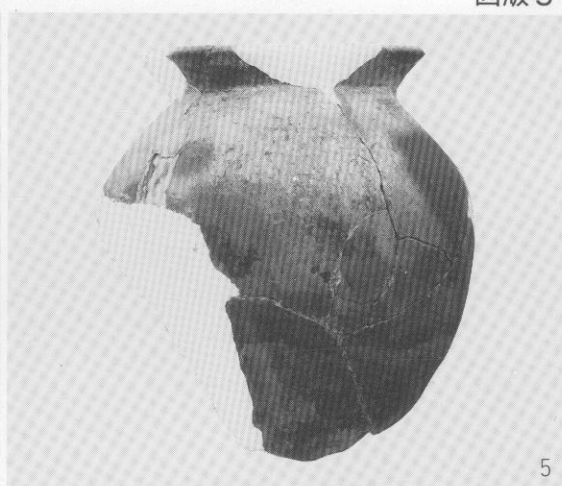
SD01 (a-a')



SD01 (b-b')



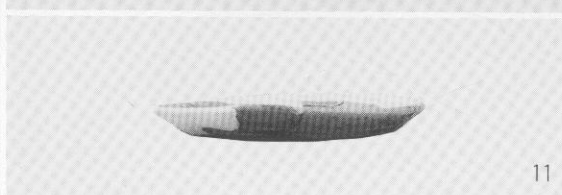
2



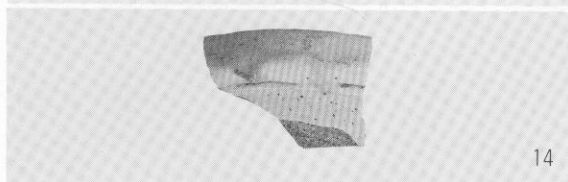
5



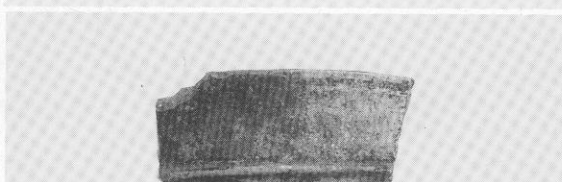
10



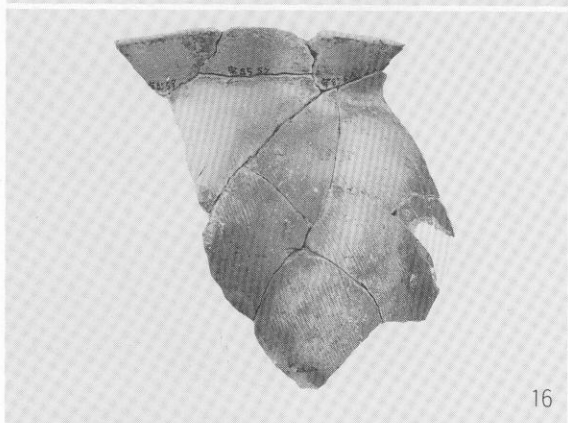
11



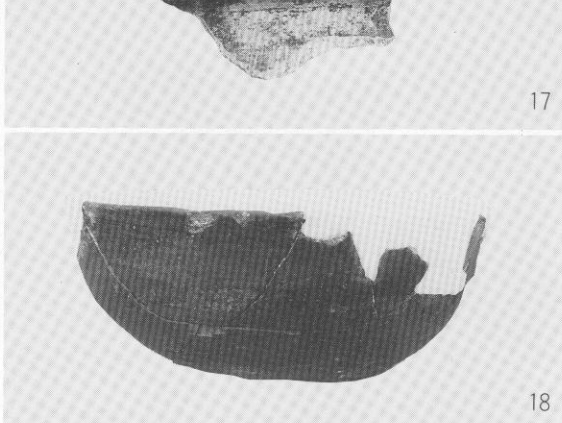
14



17



16



18

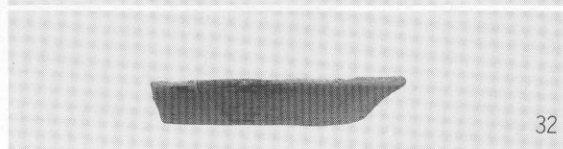
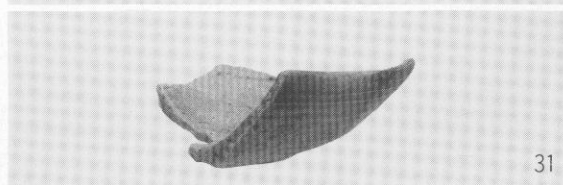
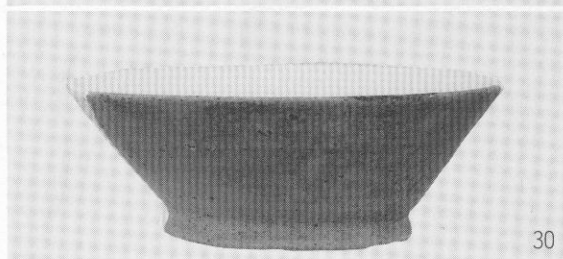
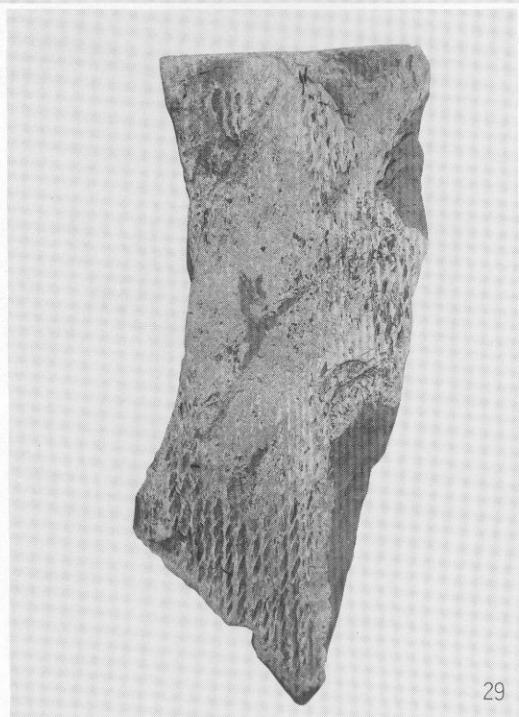
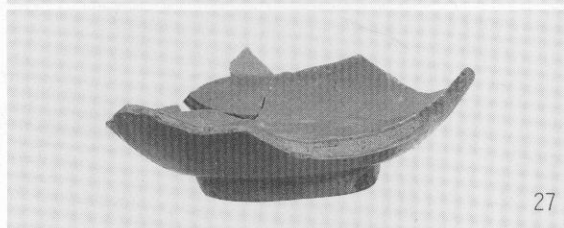
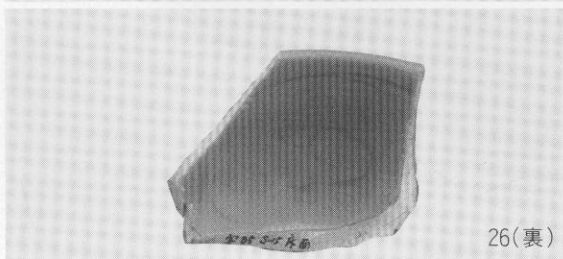
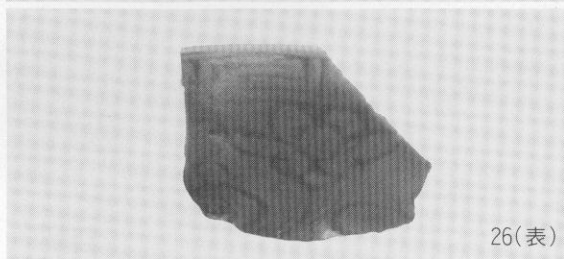
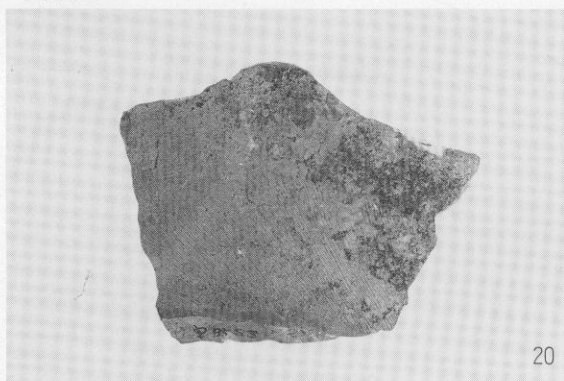


22(表)



22(裏)

※ 番号は挿図番号と同じ



※ 番号は挿図番号と同じ

大宰府条坊跡

第85次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第28集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41